

第2章 計画の前提

1. 歴史的条件

1) 首里城の変遷

首里城は琉球王朝の居城であったが、その創建年については現在まだ明らかになっていない。ここでは、首里城の形成過程を5期に分け、内郭と呼ばれる城壁が完成した第一次拡張時期を第1期、外郭と呼ばれる城壁が完成した第二次拡張時期を第2期、その後島津侵入¹⁾までの期間を第3期、薩摩支配から廃藩置県(沖縄県設置)までを第4期、廃藩置県から戦災消失までを第5期としてまとめた。

(1)第1期

山北、中山、山南と称する小国家が相互に対立・

番号	名称	年代
1	正殿	高樓を創建とあるが場所は不明
2	美福門	1422~1489年創建
3	瑞泉門	1406~1469年創建
4	漏刻門	1406~1456年創建
5	淑順門	1406~1469年創建
6	右掖門	1406~1469年創建
7	龍潭	1427年創建
8	安国山	1427年創建
9	中山門	1427年創建
10	天界寺	1450~1456年創建

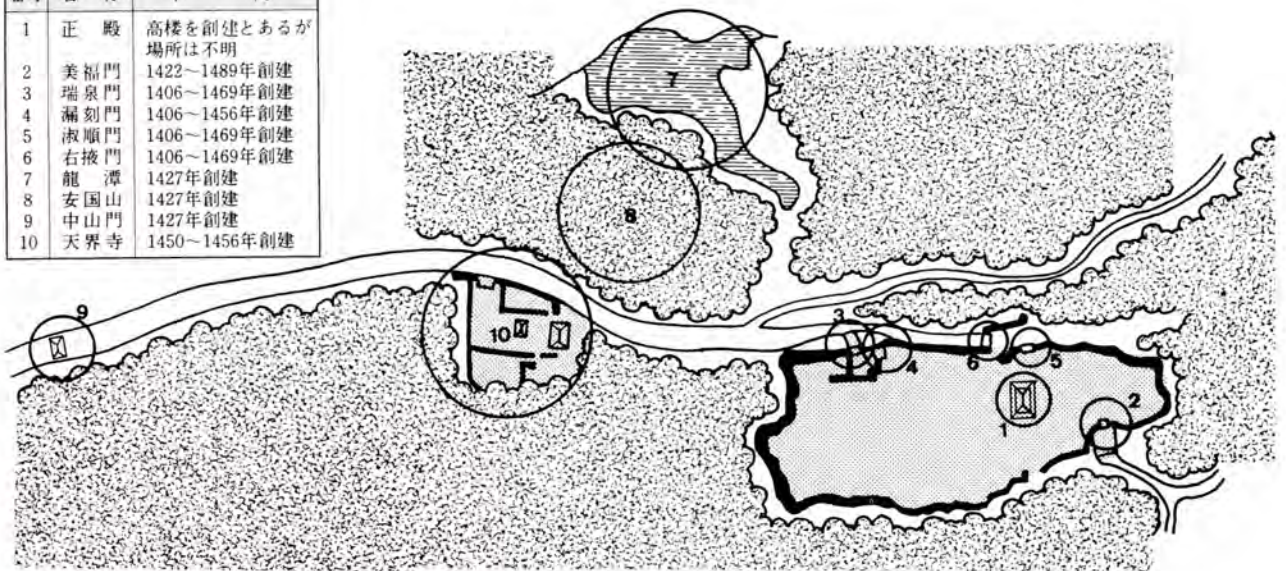


図-1 築城の変遷図(第1期)

抗争を繰り返していた14世紀中期の三山鼎立時代、察度王統により王城としての歴史が始まるという説があるが、その時代の正殿については、「数丈の高樓を建造し以て遊観に備う」という後世の記録しか残っていない。

1406年、中山の覇権を手中にした尚巴志は第一尚氏王朝を確立して拠点为首里城に移し、国相懐機をして城の拡張(第1次拡張工事、内郭城壁と連続する門)及び龍潭と安国山(1427年)の整備を行った。さらに中山門(1428年)や天界寺(1450~56年)を創建するなど、王都の建設を推進した。

(2)第2期

1469年、尚円の即位により第二尚氏王朝が成立し、引き続き首里城は王城となる。第三代国王尚真は、城と城下の整備を積極的に進めた。欽会門と久慶門、それに連なる北側外郭の整備、正殿の欄干や北殿の創建、龍樋(1523年)の設置、城外では円覚寺(1494年)、玉陵(1501年)、円鑑池や弁財天堂、天女橋、龍淵橋(いずれも1502年)、園比屋武御嶽石門と弁ヶ岳御嶽石門(1519年)の創建、真玉道(1522年頃)の整備を行っている。尚清王は尚真王のあとを継ぎ、引き続き城と城下の整備を進めて守礼門(1527~55年)、

1543~46年にかけて継世門とそれに連なる南側外郭の整備を行っている。その他、綾門大道沿いに大美御殿(1547年)を創建している。

城内には正殿や北殿以外にも多くの建物が見られるが、現在のところ創建年代についてはそのほとんどが明らかになっていない。しかし、王朝時代から中国や日本本土、朝鮮などと人物や文物の交流を図ってきたことから、王宮の建造技法もそこから学んだことは明らかである。したがって、城郭の整備と並んで内郭に構成する建物群の多くはこの時代に創建されたと思われる。

1) 1609年(慶長14)、3,000人余の島津軍が琉球を侵略した事件。薩摩侵入、島津入り。豊長の役などともいう。

(3)第3期

尚清王以降、島津侵入までの53年間に奉神門欄干

(1562年)が建造されているが、主だった施設の整備はほとんど行われていない。

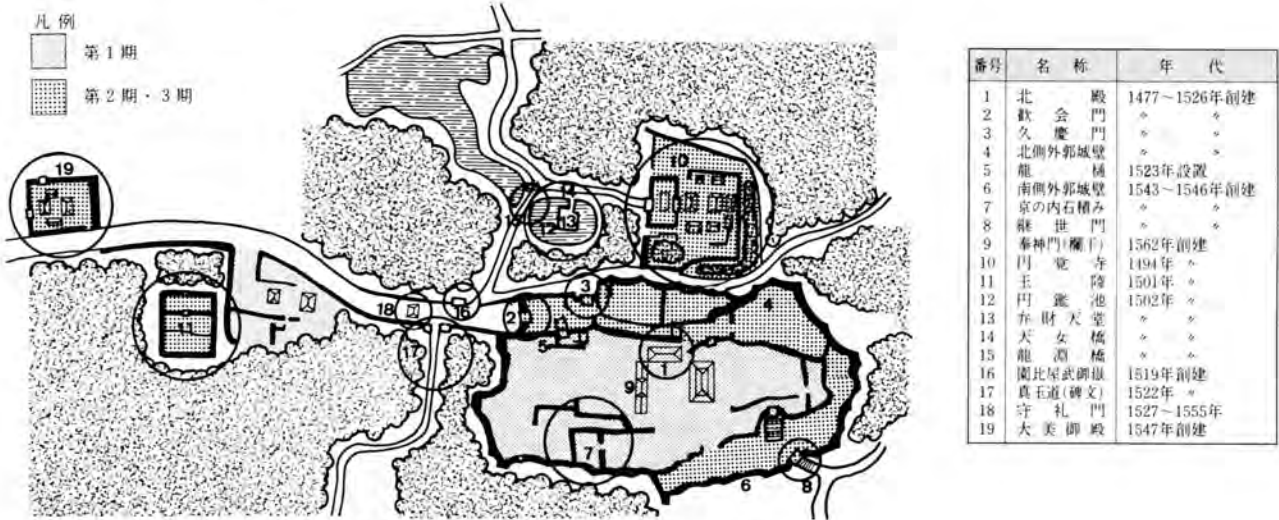


図-1 築城の変遷図(第2期、3期)

(4)第4期

島津侵入以降の首里城では、主に日本式の行事が行われる南殿が創建されたと考えられている(南殿と一体の建物である番所の創建年は不明)。その後の主な施設の整備は佐敷殿と金蔵(1732年)、寝廟殿と世添殿(1753年)の建造記録があるが、城内の建物の構成から見ると、これらは補足的な施設である。城外

では首里観音堂(1616年)、中城御殿(1621～40年)、世持橋(1661年)が創建され、また、円覚寺前の道(1673年)など「首里古地図」(1700年代初期)に見られる古都首里の姿が完成する。この間、正殿や南殿、北殿などは2度の火災にあっており、また地震や台風などの被害を受け、城郭や門の修理を行っている。

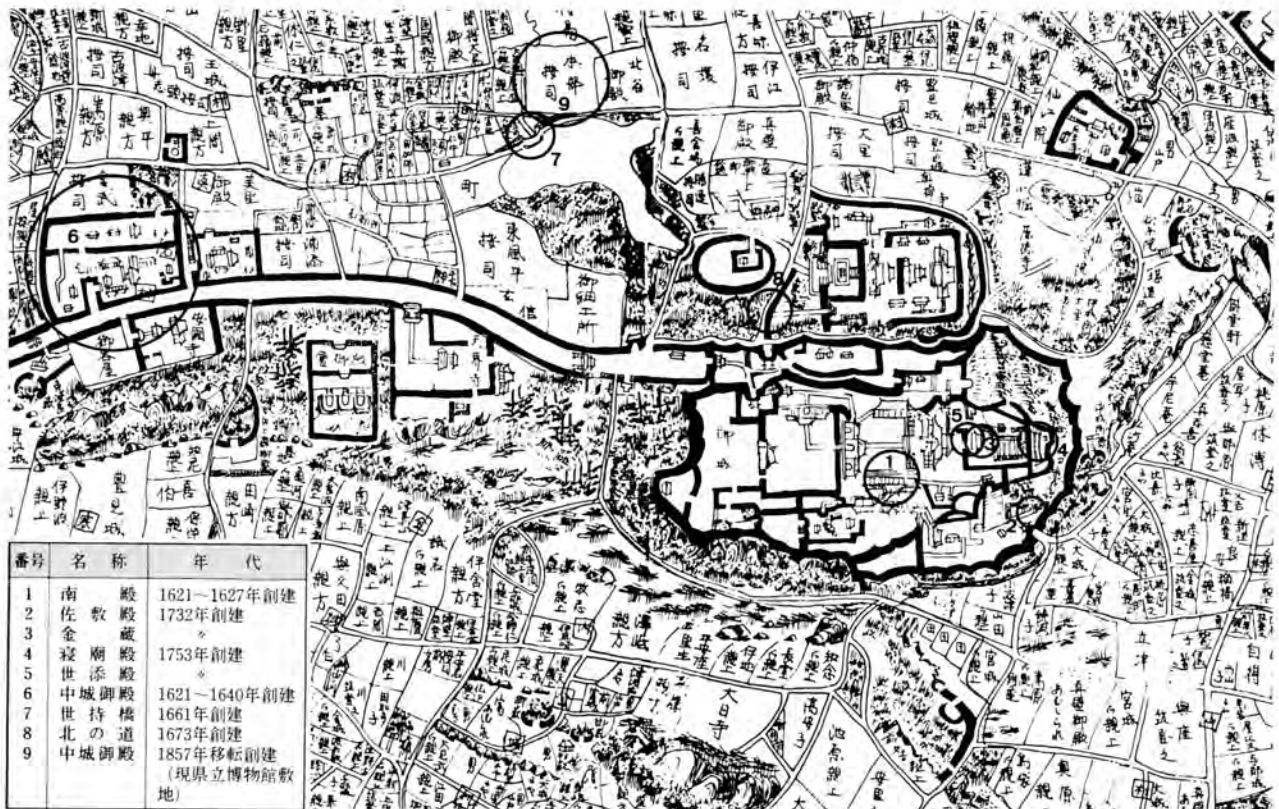


図-2 築城の変遷図(第4期)

「首里古地図」(部分、1854年再調整)より

(5)第5期

1879年(明治12)、時の明治政府は軍隊や警察官を動員して、首里城の明け渡しを迫った。国王尚泰が臣下とともに城を出たので、ここに450年続いた琉球王国は崩壊し、新たに沖縄県が設置された。

明け渡し時に城内に入った熊本鎮台沖繩分遣隊は、1896年(明治29)に撤退するまでの17年間そのまま首里城に駐屯した。首里城の所有権もそのときから陸軍省所管となっている。1893年(明治26)に熊本鎮台が作成したと思われる官舎の配置図(資料編233ページ)

には、寝室(正殿)、自習室(北殿)などと、当時の建物の用途が記載されている。

1880年(明治13)より開始された学校教育制度と関連して、1899年(明治32)生徒数増加を理由に城内に分教室が設置された。その後師範学校の附属小学校、工業徒弟学校などが城内の既存建物を校舎として使用している。そして、広福門と奉神門を取り壊して1911年(明治44)には「下之御庭」と「京の内」北側に首里尋常高等小学校(当時)の新校舎を建設した。

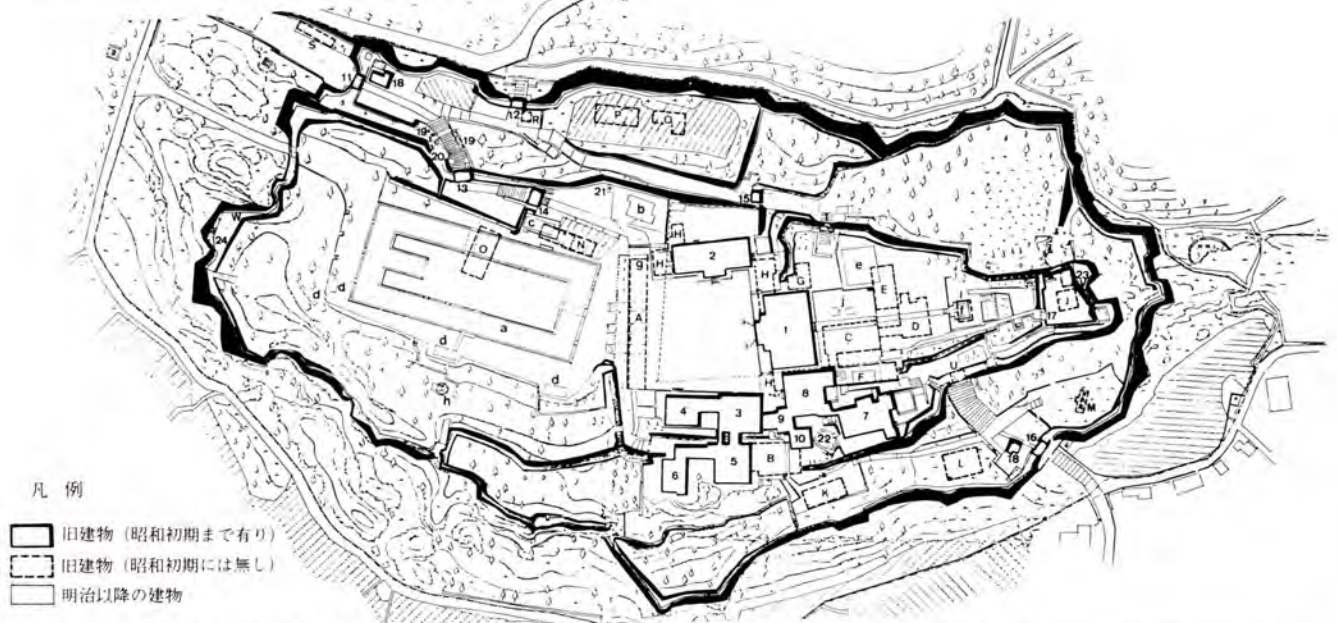


図-1 築城の変遷(第5期 昭和初期)

「旧首里城図」阪谷良之進編(文部省技官、1931年頃) 沖縄県立図書館蔵

表-1 建物名称

昭和初期まで存在していた建造物		
1. 正殿(沖縄神社拝殿)	19. 支那冊封使石碑	N. 広福門(大与座・寺社座)
2. 北殿(市公会堂)	20. 龍樋	O. 系図座・用物座
3. 南殿	21. 日影台	P. 銭蔵
4. 番所	22. 菊銘御嶽	Q. 係員詰所・廊
5. 書院	23. 東のアザナ	R. 門番詰所
6. 鎖之間	24. 西のアザナ	S. 外番所・廊
7. 二階殿		T. 淑順門
8. 旧藩王及び王妃居室、内原書院、奥書院(黄金御殿)	昭和初期にはなかった建造物	U. 美福門
9. 近習詰所	A. 奉神門(納殿・君誇)	V. 西のアザナ鐘楼
10. 奥書院	B. 御物当詰所・奉行詰所	W. 東のアザナ鐘楼
11. 歛会門	C. 世添殿	明治以降の建造物・その他不明な建造物
12. 久慶門	D. 世誇殿	a. 首里第一尋常高等小学校
13. 瑞泉門	E. 女官居室	b. 住宅
14. 漏刻門	F. 寄満・中門・門番詰所	c. 宿直及び小使室
15. 右掖門	G. 西の当蔵	d. 便所
16. 継世門	H. 廊下等	e. 社務所、神銭所
17. 白銀門	I. 金蔵	f. 本殿
18. 門番詰所	J. 寝廟殿	g. 鳥居
	K. 料理座	h. 拝所
	L. 大台所	i. 古井戸、手水壺
	M. 佐敷殿	

2) 城郭の様式と特徴

首里城の城郭は中国や日本本土の影響を受けながらも独自の技法や様式を生み出した。城壁はいわゆる内郭城壁と外郭城壁を基本とし、地形的要因から多くの支壁があり、構造上から見ると多郭式の平山城である。

城壁は直線や直角で交わるところがほとんどなく、地形に沿って主に曲線で構成されている。歛会門や久慶門周辺、東のアザナ周辺、西のアザナ周辺の城壁はより複雑で特徴的な曲線を生み出している。東西に延びる尾根線は、北側や南東側が斜面となり、南西側と東のアザナ周辺が崖地の石灰岩台地となっている。城壁は、このような複雑な地形にあわせて、構築されている。

(1) 城の構え

首里城内の主要な建物群は内郭の東半分に位置している。最も中心となる正殿は西面し前面に「御庭」と称される式典広場があり、この空間を取り囲むように北に北殿、南に南殿・番所、西に奉神門がある。正殿から西側にある施設は俗に「前」と呼ばれる公の空間、東側は「御内原」(奥)と呼ばれる居住空間となっている。

このような城の構えは、中国の宮殿の構えを模範と

していると言われている。沖縄の城の研究がまだ進んでいない状況では中国の宮殿との単純な比較は難しいが、代表的な紫禁城¹⁾との類似点、相違点を挙げてみる。

①類似点

- ・歛会門は紫禁城の午門に相当する。
- ・奉神門は紫禁城の太和門に相当する。
- ・正殿は紫禁城の太和殿の影響を強く受けた建築様式で、建物の長さは太和殿の1/2程度である。
- ・正殿前広場の御庭と太和殿前広場は、共に四方を建物や壁に囲まれた方形状の空間である。
- ・奉神門中央から正殿に向かう通路(浮道)は、太和門から太和殿に通ずる軸線上の道(甬道)と同様の機能や形態を有する。
- ・御庭は公事や祭事が行われた儀式空間で、太和殿前広場の儀式空間の影響を受けていると思われる。

②相違点

- ・紫禁城は南北の軸線によって建物配置が決定されているが、首里城は東西軸に延びており、しかも、地形の制約などから各建物は必ずしも整然とした配置にはなっていない。

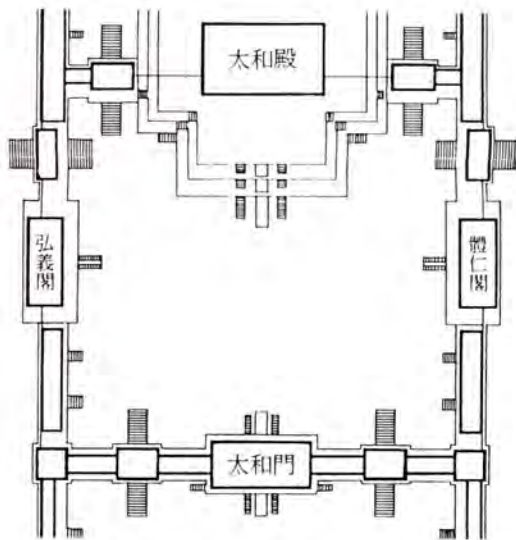


図-1 紫禁城の太和殿を中心とした空間構成



図-2 首里城の正殿を中心とした空間構成

1) 中国の北京にある明・清時代の宮城。南北961m、東西753mの敷地を城壁が囲み、その中には多くの建築物や広場が配置されている。

(2)城壁 (内郭、外郭)

首里城の内郭城壁と外郭城壁を見ると、東のアザナ周辺を南北に横切る城壁は、標高が高くて(約135m)尾根線の幅が細いため、上空に突出した特徴的な構造となっている。また、城の南側の崖下にあるクダダグスクから歓会門にかけての内郭城壁は、切り立った崖地の上部や複雑な石灰岩台地の上に高度な技術によって構築されている。

城壁について言えば、まず外敵から城を守るため高

さが5、6mから10数mもあり、そして外敵がよじ登れないように城壁の上部1mほどに漆喰が帯状に塗られていた。さらに、台風などの自然災害から城内の施設を守るため、内部から見ても城壁は2～5mの高さに積まれていた。

さらに、隆起石灰岩地帯にあって豊富な地下水をよく保つ首里城は、城壁によって雨水を貯留する地下ダムを形成して龍樋や寒水川樋川、円鑑池、龍潭へと水を供給することの出来るシステムがつけられていた。

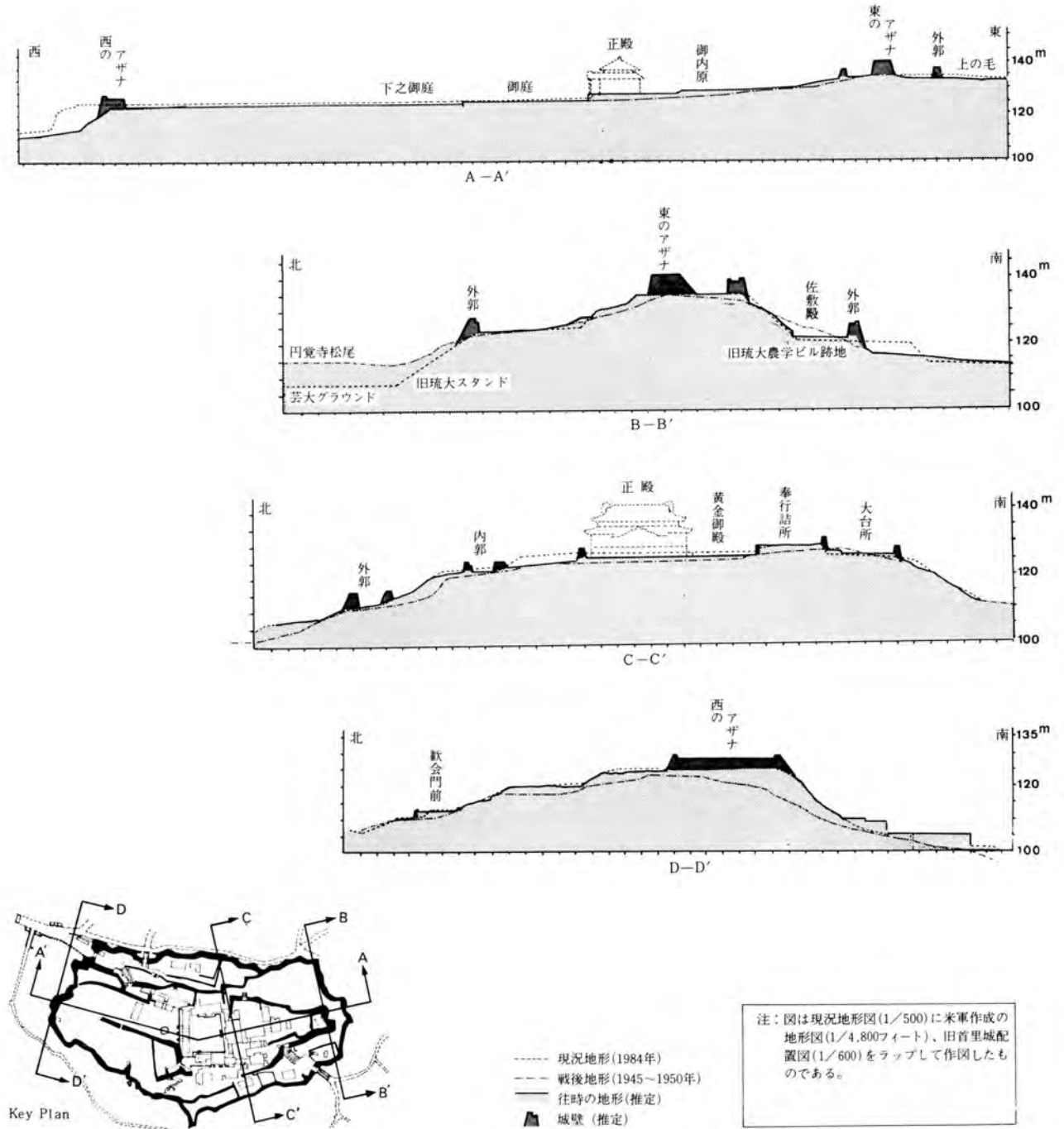


図-1 主要断面図

3) 城内の機能

尚真王（1477～1526年）は、城内外の整備を積極的に推進するとともに、各地に分散する按司¹⁾を首里城下に集めることにより中央集権国家を確立して琉球王府を確固たるものにした。

王府の行政機構には三番出仕制やヒキ、庫理と称される独自の組織・機関が存在し、対外関係・交易方面を管轄する機関もあった。また、地域支配の諸制度や按司層・官人層を編成する位階制度、職制が明瞭に存在していた。近世に入ると薩摩藩を介する幕藩体制秩序との調整、その枠内での琉球の統治主体としての王府の執行体制の確立と任務職掌が明確化されていた。

王朝が確立した後、王府において国家的宗教組織や各種の公的神女が誕生した。王国の最高神女としての公的地位を占めたのが「開得大君」と称される女性で、王族婦人がその職に任命された。その任務は王国の重要な祭祀を通じて国王の長寿、王室の繁栄、五穀豊穡、航海安全などを祈ることにあつた。ある時期までその宗教的勢力は政治力を圧するほどであったが、尚真王以降に政教分離策がとられ、その勢力はしだいに低下していった。

(1) 施設の利用

① 行政施設

琉球王府の行政機構は、国王を頂点^{せつせい さんしかみ}に²⁾表十五人で構成される上部組織の下に各役所が配属されていた。王府の機構には司法、行政、立法の全てが組み込まれ、さらに王府の主催する行催事や王家の生活に係る諸組織も組み込まれていた。

各役所が配属されていた主要な建物は正殿から西側にあり、特に御庭を取り囲む施設は重要な役割を果たしていた。

まず、正殿は首里城で最も中心となる建物で、ここでは国王が出御しての重要な評議が行われた。北殿は別名議政殿とも呼ばれ、ここで上部組織による諸評議が行われた。その他南殿・番所、書院などが行政施設として利用されていた。

② 居住施設

城内には国王及び王妃、王夫人、王女（王子は城外の中城御殿）の住居があり、さらに城人（方言でグスクンチュ）と呼ばれる様々な階級の女官達が住んでいた。また、城内の御嶽（聖地の総称）や火の神を祈願する女神官も住んでいたと言われている。これらの住

居施設は正殿背後の御内原にあった。

③ 儀式施設

儀式施設としても重要な正殿には、1階と2階に「御差床」と呼ばれる玉座（御座所）があつて、国王自ら重要な行催事を行った。また、北殿では中国からの使者である冊封使の接待が行われ、南殿では薩摩の役人を接待したり、1年を通じて主に日本式の行事が行われた。一方、規模の大きな年中公事や冊封の式典などの政治的儀式は主に正殿前の御庭で催され、最高神女による宗教的儀礼は主に「京の内」で行われたようである。

④ その他の施設

その他城内には警備や収蔵のための施設、厨房、時報を知らせる鐘楼などの施設が設けられていた。

表一 施設名称

■	行政・儀式施設	1. 正殿 2. 北殿 3. 南殿	4. 番所 5. 君諺 6. 納殿
	行政施設	7. 書院 8. 鎖之間 9. 奉行詰所 10. 近習詰所	11. 寺社座 12. 大与座 13. 系図座・用物座
	住居施設	14. 黄金御殿 15. 二階殿 16. 寄満	17. 女官居室 18. 佐敷殿
■	住居・儀式施設	19. 世添殿 20. 世諺殿	
	儀式施設	21. 寝廟殿	
■	その他の施設	22. 銭蔵 23. 料理座 24. 大台所 25. 係員詰所 26. 金蔵 27. 正殿両廊下	28. 西の当蔵 29. 門番詰所 30. 日影台 31. 東のアザナ 32. 西のアザナ

1) 古くは琉球各地の政治的支配者のこと。王府時代には位階（官職の序列）名となる。
2) 国政を司る3人の宰相。上の摂政は形式的で、政治の実権は三司官が握っていた。

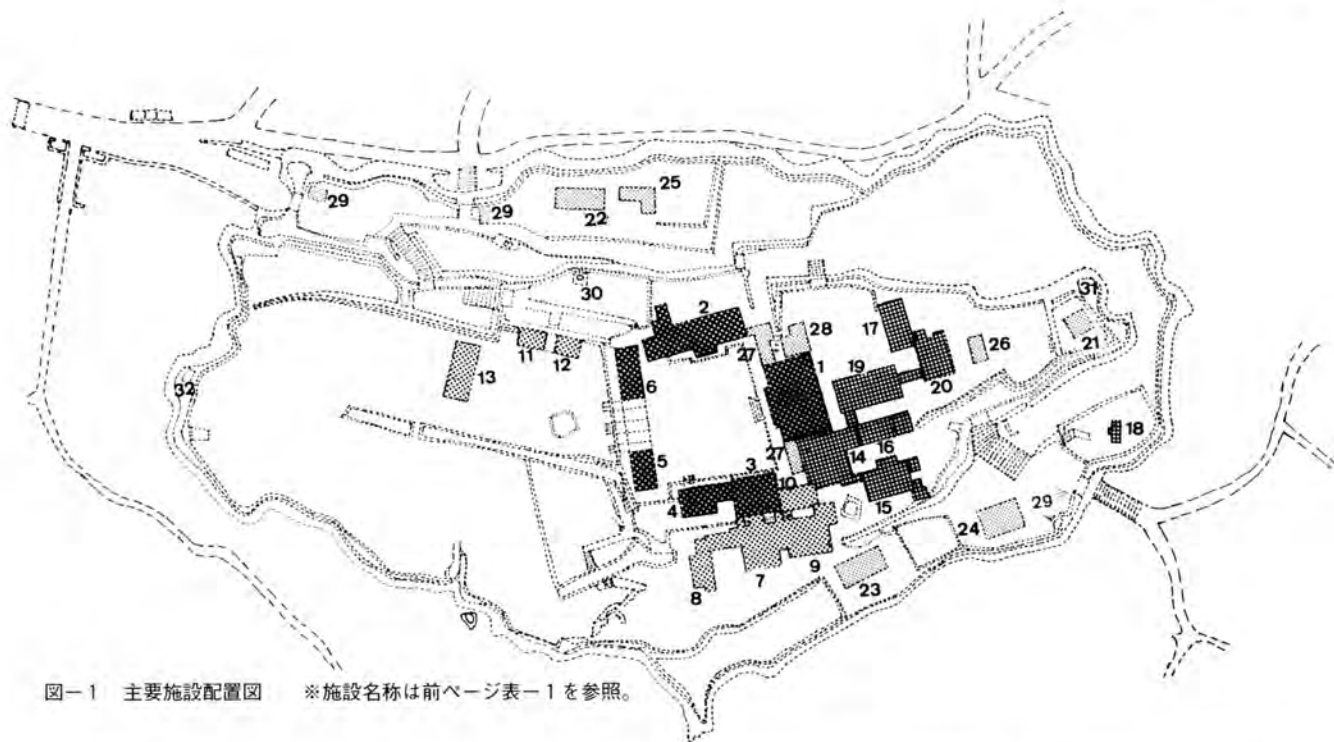


図-1 主要施設配置図 ※施設名称は前ページ表-1を参照。

(2) 行催事

① 年中公事

『琉球国由来記』（1713年）には、元旦と冬至に行われる儀式や円覚寺、天界寺、天王寺、弁ヶ嶽などを拝礼する行幸の行事、3月や5月の節句などの儀式、五穀豊穡を願う農業儀礼の祭りなど、様々な行事が記述されている。その中で最も規模が大きく重要であったのは「朝拝御規式」である。これは、御庭と正殿で繰り広げられた元旦の儀式で、国王や王子、高位高官が正装して出席し、楽隊が音楽を奏でる中、年賀の焼香、拝礼などを行うものである。首里三カ寺と呼ばれた円覚寺、天界寺、天王寺を巡る行幸も重要な儀式の一つで、正殿の1階で出発の儀式をした後、楽隊を含めた行列を組んで厳かに行われた。

② 冊封の式と宴

冊封とは、中国皇帝が琉球国王の地位を認知することである。最初の冊封は察度の子武寧代に行われ（1404年）、それ以後最後の国王尚泰（1866年に冊封）までに特別な場合を除いて22回の冊封が行われた。

琉球の国王が死去すると、中国皇帝にその訃を報ずるとともに冊封を請う。皇帝はこれによって冊封のための正・副使を遣わした。冊封使は兵役・従人・舟人・技術者・各役の数百人に及ぶ随行員とともに渡海し、琉球国王を冊封しておよそ4か月から8か月間沖繩に滞在した。

那覇港に着いた冊封使一行は天使館に宿泊したのち、隊列を組んで長虹堤を渡り崇元寺で先王の論祭を行った後、首里に上り首里城の御庭で冊封の式を行う。冊封使の滞在中に行われる接待のための宴を七宴という。第一宴は「論祭の宴」で、世子（王位継承者）と冊封使が相見の礼を行う。第二宴は「冊封の宴」で、御庭での冊封式典の後、更衣して北殿で冊封使と新国王が対拝し、献茶する。第三宴の「中秋の宴」では、御庭に設置された舞台で舞踊や演劇が行われ、冊封使は北殿から、随行員や王府の役人、王族らは正殿、番所、奉神門などからこれを観覧した。尚敬王代の1719年には、初めて「組踊^{くみおどり}」¹⁾が演じられ、琉球芸能発展の契機となった。第四宴の「重陽の宴」では龍潭で龍舟（ハーリー）の戯れが行われ、さらに北殿で第三宴同様の宴が行われる。第五宴の「冬至の宴」でも三宴同様の宴が行われ、第六宴の「拝辞の宴」では前宴同様の宴だが、中城御殿で三爵を奉じて別れる。第七宴は「望舟の宴」または「登舟の宴」で、那覇の天使館において国王が冊封使一行の帰国を前に宴を設ける。

③ 神事

開得大君の下には君々と総称される上級神女がおり、さらに、各間切や島々にはノロあるいはノロクモイと呼ばれる神女達がいた。首里城内では、正殿や寝廟殿などにある火の神や御嶽に対して神女を中心に毎日あるいは定期的に拝礼が行われていた。神事の中で

1) 音楽と舞踊、右詞で構成される沖縄独特の伝統楽劇で、玉城朝薫が創作した。1972年（昭和47）5月に国指定無形文化財となる。

も重要なものは新国王が誕生したときに行われるもので、これは聞得大君を始め、多くの神女達が御庭で神歌を謡いながら新国王に神託を受ける厳粛な儀式であった。

(3) 動線

① 屋外動線

● 大手主動線（歛会門動線）

首里を形成する丘陵の尾根線沿いを東西に伸びる道が^{アサツボのワタミ} 綽門大道で、幅員約12m、^{コージー} 香粉（琉球石灰岩の碎石をネナシカズラの汁や線香の粉で固めた首里独特の舗装材）や石畳の道となっている。西端に中山門、東端に守礼門、道沿いには中城御殿（1873年、龍潭に面する地に移転）や玉陵などがある。そして、守礼門を過ぎると城の入口としての歛会門がある。

歛会門を入ると、瑞泉門と漏刻門、さらに下之御庭に入る広福門、3つの門口を持つ奉神門、そして正殿へとつながる。この動線は女性達の通行が許されず、また、奉神門の中央の門口は国王及び冊封使専用の門として一般の通行は許されなかった。御庭もみだりに入ることや横断することは禁じられていたと言われている。

● 通用動線（久慶門動線、継世門動線）

首里城北方の^{どうめくら} 当蔵町や^{れおなか} 大中町は「北方」と呼ばれる屋敷町で、龍潭、円鑑池、円覚寺、安国山、ハンタン山などがある。久慶門はこのような地域に開かれた

城門で、通用門としての機能を持っていた。久慶門に入ると右手には歛会門と瑞泉門、左手には石畳を上り切ったところに右掖門がある。右掖門を過ぎると北殿方面への通路と御内原へ入る女性専用の淑順門がある。

首里城南側の赤田町、崎山町、鳥堀町方面は総称して三箇と呼ばれた台地上の盆地で、豊富な地下水を保ち、古くは水田、のちには沖縄最大の泡盛酒造地区となった地域である。継世門はこの地域に開かれ、平常は通用門として機能していた。継世門を入ると、正面に美福門がある。美福門を入ると右手には東のアザナ方面への通路、左手に進むと二階殿に入る木造の門、右側に御内原へ入る中門がある。正面に進むと^{アサニウドモン} 黄金御殿があり、その1階には御庭へ抜ける通路（クラシンウジョウ）がある。中門を入ると右手に石畳の通路があり、その突きあたりに白銀門がある。白銀門は国王専用の門として一般の出入りは禁じられていた。

● 木曳門、その他動線

歛会門の南側内郭城壁にあった石造アーチ門を木曳門という。これは城内施設の普請（建築工事）が行われるときに材料などを搬入するための門で、普段は石積によって封じられていた。

京の内には、用途が不明な開口部やアーチ門がいくつかある。現時点ではこれらの用途や名称などは不明のままとなっている。

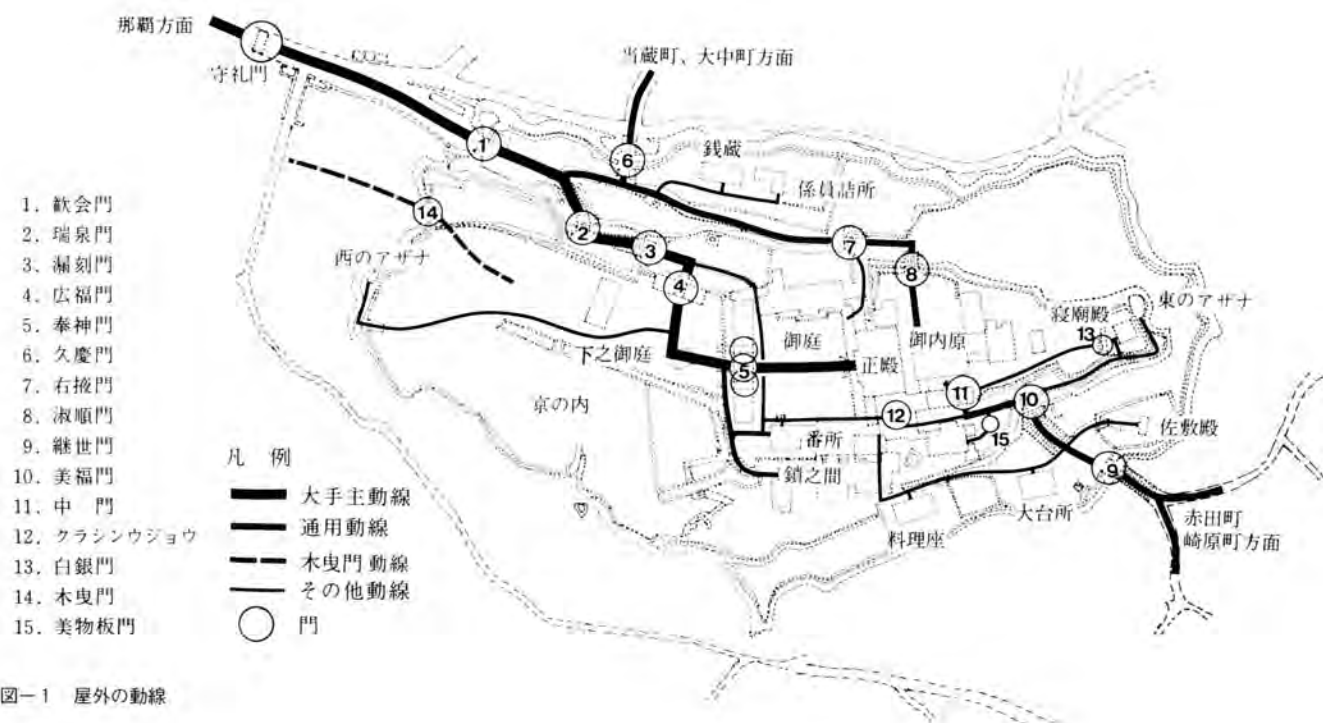


図-1 屋外の動線

②主要建物群の内部動線

正殿を中心とする建物群は、互いに接したり廊下などで結ばれて一体となった施設利用がなされており、地形の高低差を生かして建物を有機的につなげているのが特徴である。正殿1階の大広間（下庫理）で儀式があるときは、国王は黄金御殿2階から正殿2階に入り、御差床の裏にある国王専用の階段から1階に降り、

障子を開けて御差床に出御する。

城外からの用件は番所で取り次がれ、各役所へ伝達された。御内原への用件は、そこが男子禁制であったため、黄金御殿と近習詰所との間にある「鈴引の間」で御内原の女官に伝達されたと言われている。配置図によると、御内原にあった世添殿、世誇殿、女官居室、寄満なども廊下によって連続していた。

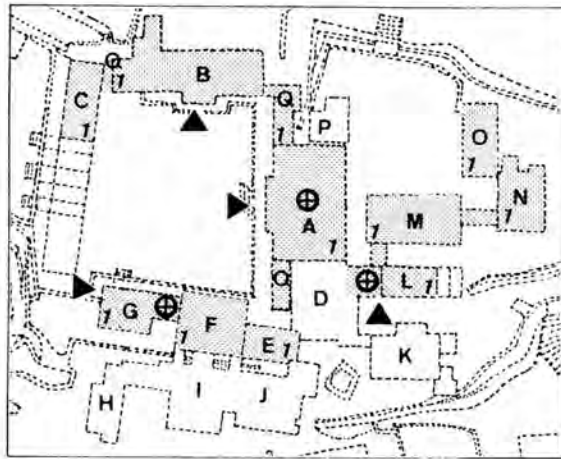






図-1 正殿1階と同じ床高での連続空間の構成

-  連続した空間と動線
-  階上への移動
-  階下への移動
-  主要アプローチ
- 1** 階高数

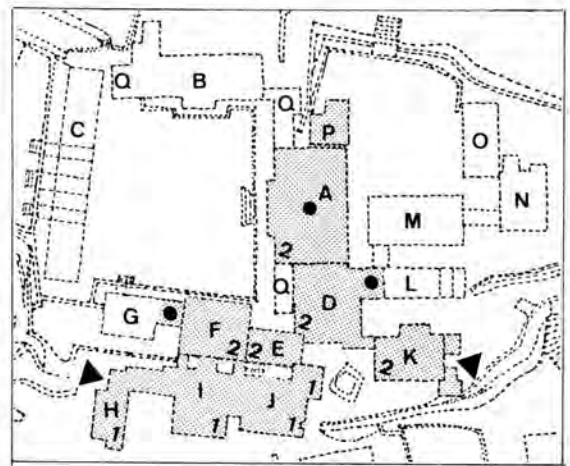


図-2 正殿2階と同じ床高での連続空間の構成

- A. 正殿 B. 北殿 C. 納殿
- D. 黄金御殿 E. 近習詰所 F. 南殿
- G. 番所 H. 鎖之間 I. 書院
- J. 奉行詰所 K. 二階殿 L. 寄満
- M. 世添殿 N. 世誇殿 O. 女官居室
- P. 西の当蔵 Q. 廊下

4) 植 生

(1) 絵図・写真等より見た首里城の植生（次ページ 図-1）

王府時代や明治時代に描かれた首里城の絵図、古写真などから往時の植生の状況を知ることができる。これらを見ると、施設のある区域を除いて首里城全体が鬱蒼たる森であったことが分かる。主な特徴を見ると、

1. 東側外郭周辺……東側は風衝植生の傾向を示す低木の群生、北側は石灰岩植生の高木類。
2. 東のアザナ周辺……石灰岩植生が御獄の森として守られている。樹種はオオバギ、リュウキュウガキ、

サンゴジュなど。

3. 右掖門西石畳沿い……アコウの太木など。
4. 南側外郭周辺……石灰岩植生の自然林。
5. 書院南側……本格的な庭園で、露出した石灰岩を庭石に見立ててソテツや枝振りの良いマツなどが植えられている。
6. 瑞泉門前……ソテツの株植えと自然植生と思われる広葉樹。
7. 淑順門前……ソテツの株植え。
8. 京の内から西のアザナ周辺……鬱蒼とした御獄林。

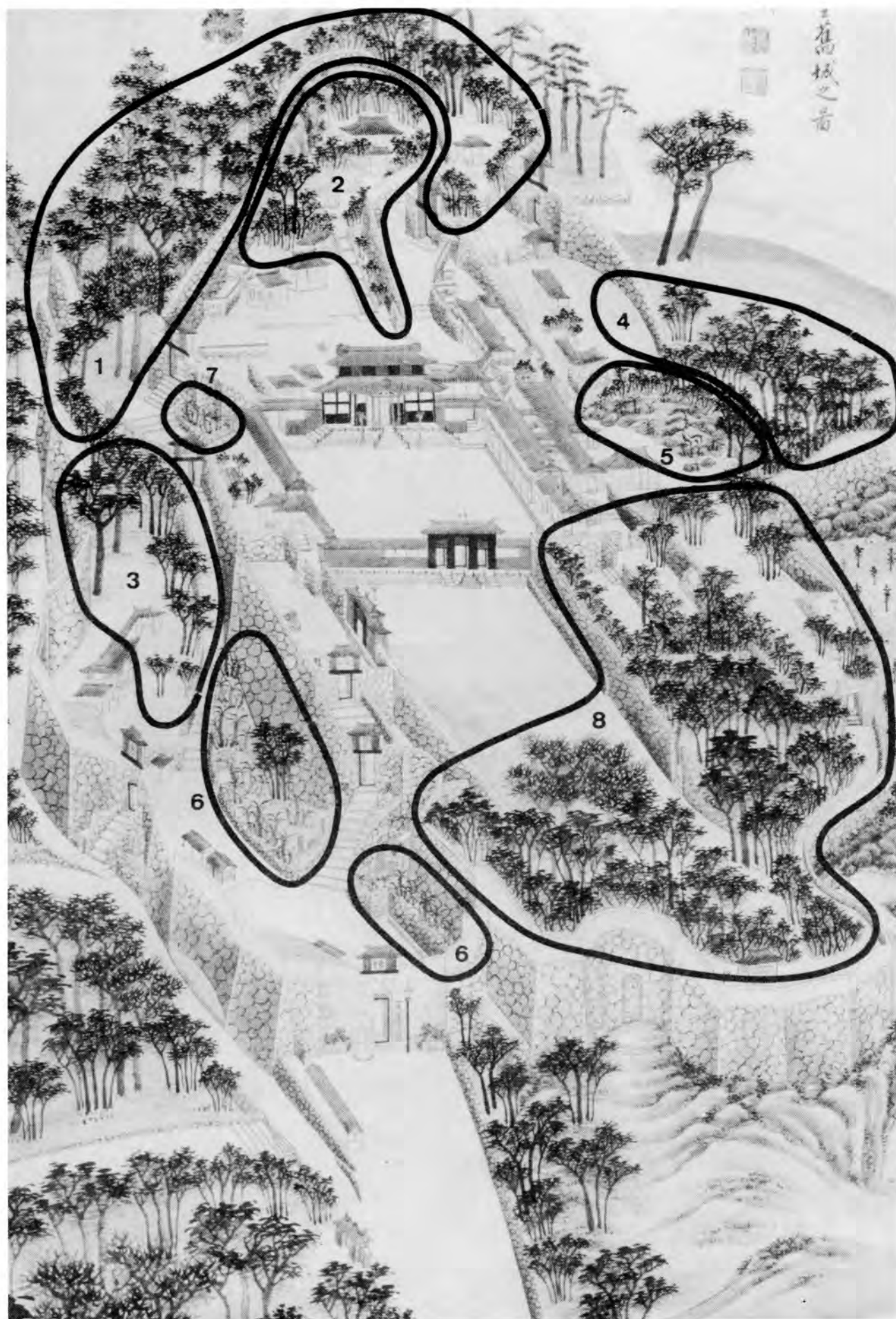


図-1 絵図よりみた植生分布状況図 「首里旧城之図」に加筆

(2)昭和初期の首里城の植生

戦前の首里城の植生は、瑞泉門西にモガシの大木、久慶門から右掖門に上る石畳の左手にはアコウの大木が点在し、ハマヌビワが植えられていた。東のアザナ北側にはチガヤ、東側には低木類、南側にはオオバギやリュウキュウガキ、サンゴジュ、チガヤなどがあった。京の内の中には石灰岩植生の密林でクロツグが多く分布していた。城外では綾門大道周辺にヒカンザクラ、アコウ、ハマヌビワ、クスノハカエデ、タマシダ、リュウキュウマツ、アカギなど、またハンタン山にはアカギやクワズイモ、円覚寺周辺にはビンロウジュの大木やアカギの大木などの植生があったと言われている。

次に、昭和14年に植生現況を調査した研究者の目録から、自然度の高い石灰岩植生の森の構成種が数多くみられ、また、目録の記載樹種の中には人為的に植栽したと思われる樹種も見られる。

㉑食用となる植物：ゴボウ、シュンギク、リュウキュウシュンギク、クロ、スイゼンジナ、サンシチ、ナス

㉒鑑賞する草本植物：テンジクボタン、キク、ヒオウギ、イチハツ、スイセン、タマスダレ、ジャノヒゲ、リュウゼツラン、ハナチョウジ、キョウチクトウ、キリンカク、アヲサング、オシロイバナ、ダンドク

㉓その他：センダンキササゲ、テリハボク、フクギ、デイゴ、クスノキ、スギ、メラカンマキ、モモ、ビョウヤナギ、ヒカンザクラ、ナンキンハゼ、ソウシジュ、マンゴー、リュウガン、ノヤシ、カンノンチク、シュロチク、ツウダツボク、フヨウ、ブッソウゲ

以上の中で㉑、㉒は栽培植物であり、明治以降熊本鎮台や小学校に利用されるようになってから植えられたものと思われる。㉓は明治以降に導入された樹種であると思われるが、王府時代にハンタン山の樹花木園に各地から多くの樹木や花が集められ植えられており、その名残りの可能性もある。



写真-1 右掖門へ昇る石畳沿いのアカギの大木
『坂本万七遺作写真集 沖縄・昭和10年代』



写真-2 東のアザナからみた正殿裏や京の内（左奥）の植生状況
森政三コレクション



写真-3 瑞泉門前のソテツと落葉樹 伊藤勝一コレクション

2. 計画地の現況

1) 地形・地質

計画地周辺は、那覇市内で最も標高の高い弁ヶ岳（165.6m）を頂点に西側に傾斜した丘陵地で、南側は安里川の侵食により比較的急な斜面地となっており、首里城はこの丘の標高125m内外の比較的高い位置に築かれていた。那覇市街地や東シナ海、そして、太平洋が眺望でき、周囲からはこんもりとした緑に包まれた城の威容を仰ぎ見ることができた。しかし、第二次世界大戦の沖縄戦や、戦後の琉球大学の立地などにより地形は大幅な改変がなされた。また、周辺においても近年の宅地化や道路などの整備に伴い、斜面地の開発が進み往時の景観の喪失を招いている。

計画地区周辺の地質は新第3紀鮮新世（約500万年前）に海底に堆積した島尻郡層の泥岩（別称：クチャ）及び砂岩を基盤としている。それを覆うように第4紀更新世（約10万年前）の琉球石灰岩が分布し、急崖を形成している。石灰岩の周辺には、岩が侵食し風化してできた堆積物が比較的厚くまた広く分布している（崎山町周辺）。首里の町の発達は湧水、いわゆる良質の地下水が得られたことが重要な前提となったものと考えられ、この地下水は地質の分布、性質に深く関係している。

2) 植生

首里城の植生は戦禍により完全に消失した。現況の緑は戦後の植栽や自然に回復したもので、唯一戦前の名残りの樹木は、城外に残る樹高約12mの大アカギである。地区内の平地部の樹木はその大半が1950年～1960年代に植栽されたもので、主な樹種はガジュマル、アコウ、カナリーヤシ、ワシントンヤシ、シンノウヤシ、デイゴ、モクマオウ、リュウキュウマツ、リュウキュウハリギリなどである。

首里城の植生は琉球石灰岩を基盤としており、南西側の崖面には付着性のガジュマル、ハマイヌビワなどのクワ科植物が戦後に植生している。また、崩壊した南東側斜面地の堆積部にはオオバギが群落を形成し、さらに、その下部にはアカギを中心として常緑広葉樹が植生している。

城外北西の園比屋武御嶽石門背後にはアカギ群落が植生するが、これはかつてのハンタン山を復活しようと戦後植栽されたものである。また、龍潭の廻りにはガジュマル、アカギ、デイゴ、センダンキササギ、タイワンフウなどの樹木が繁っているが、これらも戦後の植生である。



写真-1 西側よりみた計画地（昭和61年頃）



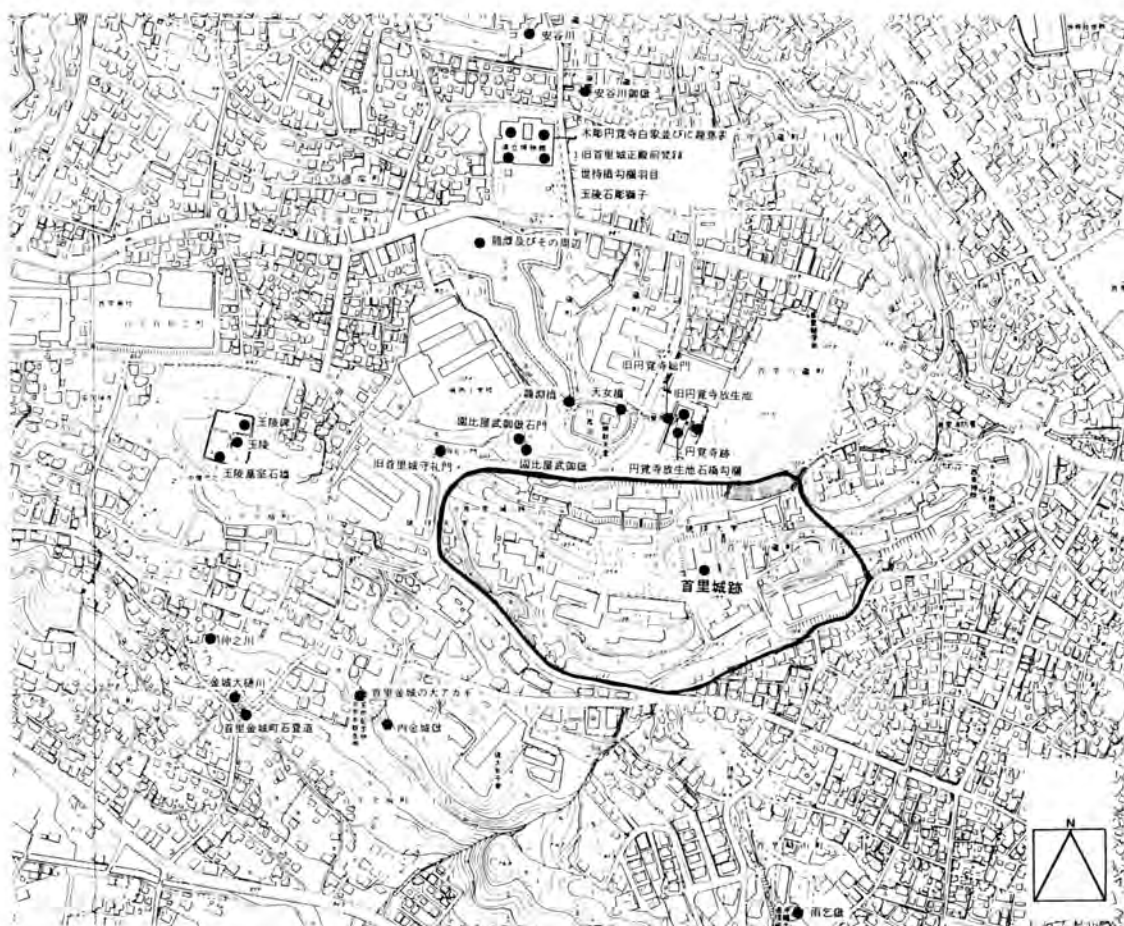
写真-2 東側よりみた計画地（昭和61年頃）

3) 文化財

計画地区は国指定文化財史跡首里城跡となっている。史跡などの文化財や伝統的な町並もよく残されている。また、周辺には王朝時代の由緒ある建造物や彫刻、

表一 指定文化財一覧

種別	名称	指定年	場所	備考	
■国指定文化財	・建造物	1 旧円覚寺放生橋	昭47. 5. 15	当歳町2丁目	県市
	〃	2 天女橋	〃	当歳町1丁目	
	〃	3 園比屋武御嶽石門	〃	真和志町1丁目	
	〃	4 王陵墓室石牆	〃	金城町1丁目	
	・史跡	5 首里城跡	〃	当歳町3丁目	国、県
	〃	6 円覚寺跡	〃	当歳町1、2丁目	
	〃	7 王陵	〃	金城町1丁目	県、市
	・工芸	8 旧首里城正殿鐘	昭53. 6. 15	県立博物館所蔵	
	〃	9 旧円覚寺梵鐘3基	〃	〃	県市
	・天然記念物	10 首里金城の大アカギ	昭47. 5. 17	金城町3丁目	
■県指定文化財	・建造物	11 龍淵橋	昭34. 1. 29	当歳町1丁目	市
	〃	12 旧首里城守礼門	昭47. 5. 12	当歳町3丁目	
	〃	13 旧円覚寺総門	〃	当歳町2丁目	市
	・彫刻	14 王陵碑	昭34. 1. 29	金城町1丁目	
	・史跡	15 龍潭及びその周辺	昭30. 11. 29	真和志町1丁目	市
	〃	16 園比屋武御嶽	〃	〃	
	・史跡及び名勝	17 首里金城町石畳道	昭39. 5. 1	金城町2、3丁目	国
	・彫刻	18 円覚寺放生池石橋勾欄	昭33. 3. 14	当歳町2丁目	
	〃	19 世持橋勾欄羽目	〃	県立博物館所蔵	県市
	〃	20 王陵石彫獅子	昭31. 12. 14	金城町1丁目	
■市指定文化財	・史跡	21 雨乞嶽	昭51. 4. 16	崎山町1丁目	市
	〃	22 金城大樋川	昭52. 4. 8	金城町2丁目	
	〃	23 仲之川	〃	〃	市
	〃	24 安谷川	昭53. 11. 14	大中町1丁目	
	〃	25 寒水川樋川	昭54. 7. 21	寒川町1丁目	市
	・有形民俗文化財	26 安谷川嶽	昭52. 6. 27	当歳町1丁目	
	〃	27 内金城嶽	昭53. 11. 14	金城町3丁目	市



図一 首里城跡周辺文化財分布図

3. 計画地の交通条件

1) 道路網の現状

本公園計画地は、那覇市の中心市街地とは県道40号線で結ばれ、地区の東側を那覇・糸満線（外環状線）が南北に通る、これに向かって外側から県道5号線、県道28号線、市道鳥堀石嶺線、沖縄自動車道が取り次いでいる。本地区より本島中・北部方面への交通は県道40号線、外環状線を経て国道330号、58号、県道5号線が利用されている。また、本島南部方面へは県道40号線、外環状線を経て国道329号、331号及び県道76号線が利用されている。

県道40号線、県道28号線、外環状線、市道崎山松川線に囲まれた範囲は、首里城跡を中心とした歴史的な町並の環境が良く保たれている地域で、この中の道路網は、地域の中央を東西に延びる県道40号線を生活幹線とし、県道49号線、県道50号線、市道赤田寒川線、市道守礼門南側線などを区画街路とした道路網構成となっている。さらに、これらを結んで金城町の石畳や坂道、階段など歴史的な細街路網が地形を巧みに生かしながら発達している。

2) 道路網整備の状況

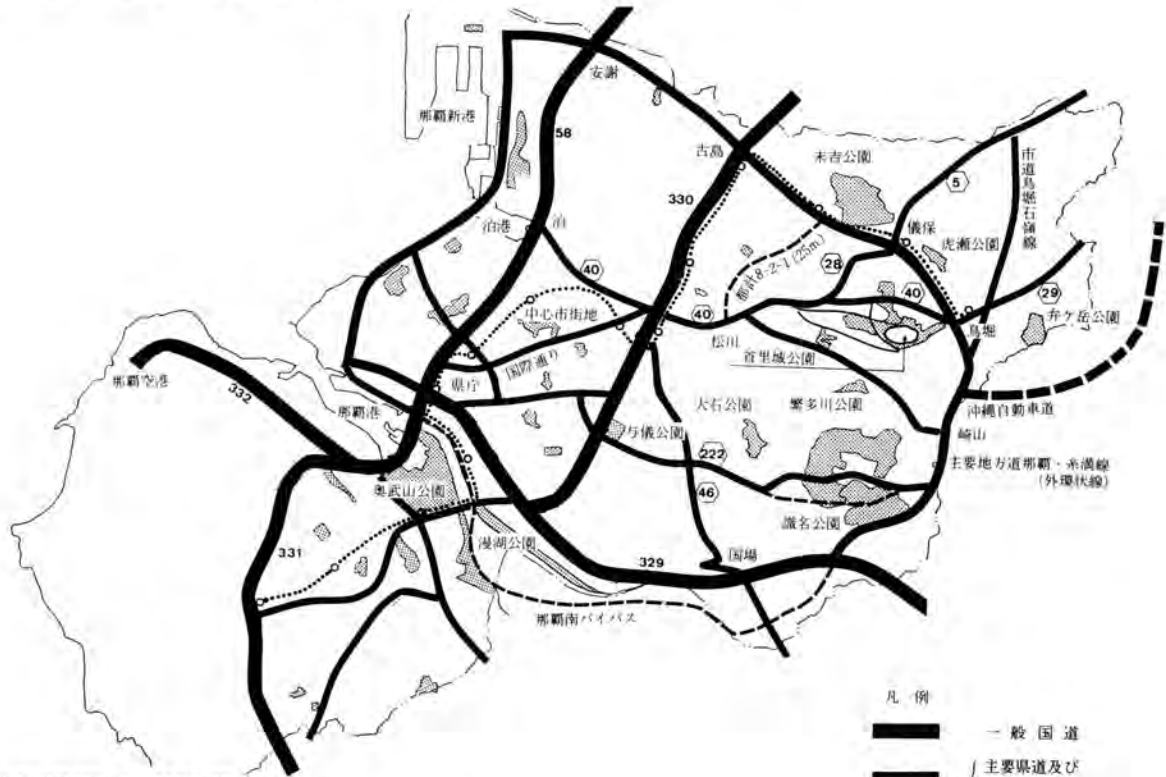
地区周辺の都市計画道路は、県道40号線、県道28号線、外環状線、市道崎山松川線などがある。さらに県

道40号線の松川町内より外環状線へ延びる幅員25mの道路が計画されており、今後県道40号線のバイパスの役割を担うであろう。

3) 公共交通の状況

現在、沖縄県には軌道システムによる交通手段はなく、路線バスが唯一の公共交通機関となっている。本地区を經由する路線バスとしては那覇市街地と本島中部方面を結ぶ市外線の系統が県道40号線、県道28号線を使用して約150本/日、本島南部の与那原町と中部方面を結ぶ市外線の系統が外環状線を使用して約90本/日、那覇市街地と地区北東にある石嶺ターミナルや南東の新川ターミナルを結ぶ市内路線の系統が、県道40号線、県道28号線、外環状線、市道崎山松川線等を使用して約425本/日運行している。朝夕の時間帯は、県道40号線がバスレーンとなることや中心市街地の交通が混雑することなどから通勤、通学に良く利用されている。

現在、那覇空港から那覇市街地を經由して首里^{てら}汀良町まで新交通システムによる公共交通機関の導入が計画されている。



図一1 主要道路網図（昭和61年現在）

4) 地区へのアプローチの状況

本地区へのアプローチ道路としては、県道40号線より分岐した県道50号線や県道49号線、市道赤田寒川線を経由した市道守礼門南側線がある。また、歩行者へ供される道路としては金城町の石畳道や市道首里高校南側線などがある。

自動車による本地区へのアプローチの状況を見ると、県道40号線～49号線、県道40号線～県道50号線を利用するパターンが主で、守礼門南側線を利用するパターンが若干見られる。現在守礼門を訪れる観光客の交通手段は約80%が観光バス、20%が観光タクシーやレンタカーなどの普通自動車であり、徒歩による来訪はほとんど見られない。

4. 観光

近年、国民生活の力点は「レジャー、余暇生活」に最も高い関心が持たれてきた。労働時間の短縮と自由時間の増大、さらに、高齢者層の増大などとも相まって、心の豊かさと生きがいを求めるための観光レクリエーションは重要な役割を果たしつつある。

沖縄県の観光は、1975年（昭和50）に開催された沖縄国際海洋博覧会を契機に飛躍的な伸びを見せ、「昭和58年度県民所得統計」によると県外からの受注額総数の約14%（約2,000億円）に達し、県経済を支える重要な産業となっている。

昭和57年度より実施されている第二次沖縄振興開発計画においても重要な施策として位置づけられている。

沖縄の観光客数は、夏場の海洋レジャー、冬場の自然・伝統文化の観賞、保養を中心に年々増加の一途をたどっている。しかし、観光レクリエーションの多様化は、これまでの観光資源を活用するとともに、新たな観光資源の創出を図るなど、多様な観光需要の対応に迫られている。

本地域は、昭和61年沖縄県によって策定された『沖縄県観光振興基本計画』の中で、その歴史的な特性に応じた首里城公園の整備と、首里の歴史的な町並みの保全と整備を積極的に推進することを基本とした「観光レクリエーション重点整備地域」の一つとして定められている。



写真-1 観光客でにぎわうビーチ